
狼と狼の物語 - 赤 -

鹿野 魁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼と狼の物語 - 赤 -

【Nコード】

N0411F

【作者名】

鹿野 魁

【あらすじ】

教皇の指示で動く部隊『狼』。その部隊に所属している彼らが事件に巻き込まれます。赤ずきんのパロディ要素が入ったファンタジー小説です。

うつそうと茂る森の中を、二人の男が歩いていました。

葉の隙間から差した日光が、所々男たちの足元を照らします。

「今回の任務の内容を覚えていますか？」

右側を歩いている男が、隣を歩いている男に尋ねました。尋ねた男は、左耳に耳飾りをつつけています。耳飾りには細かい装飾がなされており、埋め込まれている赤い石は、まるで血のようでした。「確か……『森の奥に住んでいるおばあさんが、外れ物である可能性が高いから確認して来い』でしたよね」

答えた男のほうが、耳飾りをつけた男より、ほんの少し若いようです。髪は明るい茶色で、瞳は濃い茶色です。

外れ物とは、人とは違う稀有な能力を持っていたり、手に入れたりした人。特にその能力を悪用する人のことを言います。人道に外れ、畜生に成り下がったという意味で、外れ「物」と呼ばれているのです。

耳飾りの男は、茶髪の男の言葉に満足そうに頷くと、茶髪の男の言葉に付け足しました。

「そうです。そして、外れ物なら情報を聞き出さなくてはなりません」

「やっぱり、殺すんですか？」

茶髪の男が、おずおずと尋ねました。男にとって、今日は初めての任務なのです。

「そうですね。抵抗するのであれば、そういうことになりますね。出来れば殺したくは無いのですが」

そう言いながらも、耳飾りの男の表情は変わりません。

「……そういえば、君の名前は？」

少しして、耳飾りの男が言いました。

「狼ですが」

茶髪の男が答えます。それを聞いて、耳飾りの男は少し笑った後に言いました。

「それを言うなら、僕も狼ですよ。さすがにこれから行く先で、二人ともが狼と名乗るわけには行かないでしょう」

二人の名前が同じなのは、何も偶然ではありません。彼らが所属している部隊の名前が「狼」なのです。「狼」に所属している者は全て、「狼」を名乗らなければなりません。しかし、今回のように二人以上が行動するときは、特別に偽名を使います。普段から偽名を使わないのは、個人を識別出来ないようにする為です。

「特に候補が無いのなら、ルボとトートでいきましょうか。どちらがいいですか？」

耳飾りの男が言いました。ルボもトートも、異国の言葉で狼という意味です。

「じゃあ、トートがいいです」

茶髪の男 トートが遠慮がちに言いました。

ルボがつけている耳飾りは、「狼」の中でも特に手練れの狼に贈られるものです。その耳飾りをつけているルボと組むことになったトートは、内心、とても緊張していました。

「じゃあ、僕はルボですね」

耳飾りの男 ルボが、トートの緊張をよそに言いました。

「ところで今、俺たちは森のどの辺りにいるんですか？」

トートが尋ねました。たまたま、前にルボと組んでいた先輩の狼からルボが極度の方向音痴だと聞いたのを、今思い出したからです。

「さあ？ トートが知っているのではなかったのですか？」

案の定、二人は道に迷ってしまいました。

「これじゃあ、任務どころか帰ることすら出来ないじゃないですか！」

相手が先輩と言ったことを忘れ、思わずトートがあせって声を張り上げた時です。

「ねえ、どうしたの？」

トートとルボが歩いてきた方向から、少女の声が聞こえてきました。二人が声のしたほうを見ると、少し離れたところに少女が一人立っています。頭にはずきんを、手にはバスケットを持っています。二人は、道を教えてもらおうと少女のもとへ歩み寄りました。

「どうしたの？」

少女はもう一度、同じことを聞きました。

「人を探していたんだけど、迷っちゃってね。おじょうちゃんが声を掛けてくれて助かったよ」

トートはそう言うと、照れくさそうに頭をかきました。

少女は、大人なのに迷うなんて変なの。と言いましたが、トートは少女の呟きに苦笑するしかありませんでした。迂闊なことを言うと、先輩であるルボへの批判になるからです。

「あなたはなんて言う名前なの？」

好奇心旺盛な少女は、またトートに聞きました。

「俺はトート。この人はルボ。君は？」

「私はライリー。みんながつけてくれたあだ名なの」

「それは、君のずきんと関係があるのかな？」

それまで黙り込んでいたルボが聞きました。

「そうだよ。良く似合うでしょ」

ライリーはそこで初めて、男たちに笑顔を見せました。

トートは「ライリー」と言う言葉の意味を知りません。しかし、ローボがライリーのずきんに目を向けると、黒い斑点が所々につい

ています。このことからトートは、「ライリー」の意味を「斑点」と、自分で納得しました。

「うん。とてもよく似合っているよ」

そう言ってルボは笑顔で、ずきんの上からライリーの頭をなでました。

「ねえ、ライリーちゃん。君はこんなところで一人、何をしているんだい」

ルボはかgandoライリーと目線を合わせました。

「おばあさんのところに行くの」

「そうか」

「その耳飾り、赤い石がとても綺麗ね」

ルボがかgandoことで耳飾りが近くで見れたため、ライリーが目は輝かせて言います。

「これは大切な人からもらったんだ」

ルボは少し照れくさそうに言いました。そして続けます。

「ところで」

トートは、ルボのまとう空気が変わったことに気が付きました。さつきまでの温厚な雰囲気とは違い、有無を言わせぬ威圧感があります。

「おばあさんの家はどこかな？」

「あっち」

そう言つとライリーは、自分が先ほどまで向かっていた方向を指差しました。

「今日は、おかあさんに渡されたワインを持っていかないといけないの」

「そのバスケットに入っているのがそうだね」

ライリーの持っているバスケットには、一本のワインと拳ほどの大きさのパンケーキが入っていました。パンケーキにはいくつか赤い実が混ぜられています。

「このパンケーキは？」

ルボが聞きます。

「それは、おかあさんが『お腹が空いたときに食べるように』って、二つも作ってくれたの」

「そっかー。それはよかったね。ところでライリーちゃん。あそこに咲いている花をいくつか持って行ったら、おばあさんはもっと喜ぶんじゃないかなあ？」

ライリーが辺りを見渡すと、確かに、少し離れたところに花が咲いているのが見えます。風が運ぶ香りは、気分をとても良くしてくれます。

トートはルボに言いたいことがあったのですが、ルボの威圧感に負け、黙っていました。

「でも、遅くなったら……」

花を見て輝いたライリーの瞳は、今はもう、伏せられています。

ルボは立ち上がると、両手を広げて言いました。

「大丈夫だよ。おばあさんもきつと分かってくれるって」

「そうかなあ」

ライリーは、ルボを見上げて言いました。

「そうだよ」

「じゃあ、行ってくるね」

ルボの言葉にライリーは、うれしそうに花畑の中に入っていくました。

「……どうして花畑へ向かわせたんですか？」

ライリーの背中を見守っていたルボに、トートが問いかけます。

「あそこにある赤い花は、魔の花です。ルボさんならご存知でしょう？ 大人でさえ誘惑に勝てないのに、ましてやあんな子供が正気を保っていられるとは思えません」

トートには、なぜルボがライリーを花畑へ向かわせたのか分かりませんでした。魔の花には、人を眠らせたり幻覚を見せたりする効果があるのです。

「彼女はどこへ向かうと言っていましたか？」

振り向いたルボが逆に問いかけました。

「おばあさんの家に。」

トートは、いきなりの質問に困惑しながらも答えました。

「そうです。そのおばあさんと、僕たちが探しているおばあさんが同一人物では無いと言い切れますか？」

トートは言葉を紡げませんでした。

「こんな森の中で。むしろ同一人物である可能性のほうが高いでしょう。……君は、彼女に僕たちの仕事を見せるつもりですか？」

少しの間、少しの間でいいのです。僕たちが仕事をしている間だけ寝てくれていれば。子供の身だからこそ、狂って幻覚を見る前に眠る可能性のほうが高いでしょう。あとは、帰り際に僕たちが起こしてあげればいいんです。早めに眠れば、身体への影響は少ない。何日も放っておいたらさすがに別ですが、半日経つ前に起こせば大丈夫でしょう」

トートは恥ずかしくなりました。自分がどれだけ深く考えていなかったのかを知ったからです。同時に、ルボが丁寧に話してくれたことに感動していました。失礼な物言いを無言で切り捨てられても仕方が無いのに、ルボはわざわざ教えてくれたのです。

「……すいませんでした」

やっとの思いでトートは、呟きました。

「いいんですよ。初めは分からないことだらけです。その時その時に、学んでいけばいいんですよ」

そう言ってルボは歩き始めました。

「ルボさん」

「はい？」

「そっちは逆方向です」

ルボは目的地と反対の方向に、足を踏み出していました。

トートとルボがライリーと分かれてから、しばらくたった後。二人はなんとか、目的地であるおばあさんの家に辿り着きました。

「ここからは僕の領域です。君は黙って見ていてくださいね」

ルボの言葉に頷いて、トートは家の戸を叩きました。

コンコンコン……

「ライリーかい？ 戸は開いているから早く入っておいで」

中から聞こえたおばあさんの声に、トートとルボは顔を見合わせ、戸を開けました。

トートとルボから見て、正面の壁にある暖炉の前に老婆は立っています。どうやら、暖炉にかけた大きな鍋をかき混ぜているようです。

暖炉を向いたままのおばあさんは、戸に背を向けている形になるので、入ってきた人が誰かは分かりません。

「新しい薬が出来たからね。また、飲んでもらいたいんだよ」

トートは、おばあさんの背中から少し視線をずらすと、無言のまま顔をしかめました。トートの視線の先、暖炉のそばの壁には、かえるの足の干物や、瓶詰めにしたウサギの肝などが置いてあります。

おばあさんは鍋の中の液体をカップに注ぎ、振り返ると同時に言いました。

「誰だい、あんたたちは！」

見知らぬ男が二人いたことに驚いたおばあさんは、カップを取り落としてしまいました。家に、カップが割れる音が響き渡ります。

紫色の液体が触れた場所は、不気味な音を立てながら煙を上げ、腐敗していきました。

ルボが、一歩踏み出し、優雅にお辞儀をしました。

「教皇直属外れ物専門部隊、狼の一員、ルボと申します。こちらはトートです」

ルボに続いて、トートもお辞儀をします。

トートとルボが所属している「狼」は、街の教会を通さない、教皇直属の部隊になっています。「狼」に命令できるのは、国中にあ
る教会全ての最高責任者である教皇だけです。教会を中心に成り立
っているこの国では、教皇の力は時に、国王の力をも上回ります。

「もう会うことはないでしょうから、覚えなくても結構ですよ」
ルボの顔に浮かんだ笑みは、先ほどライリーに見せた優しげなも
のと正反対の、冷たい笑みでした。

トートはルボの邪魔にならないように、扉のそばに立っています。

「外れ物専門部隊……狼？」

おばあさんにはルボの言葉の意味が分からなかったのでしょうか。
眉をひそめておばあさんは呟きました。

「知りませんか？ それではスコールとハティと言う二匹の狼の
お話はご存知ですか？」

「太陽と月を追い続ける兄弟の狼だろう。それくらいは、知ってる
さ。私も外れ物の端くれだからね」

おばあさんは警戒しながら答えました。

「おや、自分が外れ物であることを肯定しましたか……それはさて
おき、話の続きをしましょう。」

あなたのおっしゃるとおり、スコールは太陽を、ハティは月を追
いかけています。世界が終わるときには、二匹は太陽と月に追いつ
いて飲み込んでしまうと言いますが、さて、この太陽と月は一切何
を象徴しているのでしょうか」

「そんなの知らないね」

おばあさんの警戒は、未だ解けません、ルボは構わずに話し続

けました。

「そうですか。まあ、これは錬金術の分野ですし、知らないのも無理は無いでしょう。」

太陽と月は錬金術において、精神と魂を象徴しているのです。

ここまで言えば、僕がどうしてもあなたの前に現れたのか、お分かりになると思いますが」

「私を殺しに来たのかい」

「それだと少し、語弊がありますね。言ったでしょう？ 僕はあなたの『肉体』を食べに来たわけじゃない。具体的に言うと『知識』をもらいにきたのですよ」

「つまり、知識を蓄えているのが精神と魂と言うわけかい」

「まあ、そんなところです。この後、あなたは僕に教会に連れて行かれます。そこで異端裁判にかけられるわけですが、間違いなく有罪になるでしょう。特にあなたは、先ほど自分で自分が外れ物だと認めましたからね。ですが、『外れ物は殺したいが、外れ物の知識は欲しい』と言うのが協会の考えなのでしょう。あなたたち外れ物の持っている知識を聞き出し、持ち帰ることが、僕たち狼の役目なのですよ。まあ、詳しいことは知りません。僕も命が惜しいもので。」

と言うことで、あなたにはいくつか質問しますが、答えてもらえますよね？」

おばあさんは、はっ。と小さく吐き捨てると続けました。

「そう言われて、おとなしく教えると思うかい」

しかし、ルボは微笑を浮かべたまま言い返しました。

「なぜ、僕がわざわざこんな長い話をしたと思いますか？ 僕は、生まれながらにおかしな能力を持っていましたね。自分が外れ物と言われないように、『狩られる側』ではなく『狩る側』の『狼』に所属しているのですか」

そこでルボは、右側の壁際にあるおばあさんのベッドに腰掛けました。

「僕と相対している人が、僕の話聞いて、これから自分の身に起こることを理解したときに限り、僕はその行動のみを起こさせることが出来るですよ。試しに一つ、質問してみましようか。」

赤いずきを被っている少女の髪が、血のように赤いのはなぜですか？」

おばあさんは話し始めましたが、本当は話すつもりは無かったのでしょう。表情には驚きが表れていました。

「あの子は、私の実験台なのさ。ある日、即効性の毒を飲ませたら、なぜか死なずに髪が赤くなっただんだ……どうしてライリーの髪が赤いのを知っている」

「尋ねているのは僕なのですが……いいでしょう。」

彼女に会ったのですよ。森の中でね。彼女と視線を合わせるためにかがんだとき、ずきんからはみ出していたのです。同じ色のずきんで隠してはいるようでしたがね。

では、次の質問です。彼女のずきんにとどころ血が付いていたのはどうしてですか？ 血の状態から、どうやらつい最近に付いたようですが」

ルボの質問を聞いたおばあさんは、いきなり、大声で笑い出しました。

「知らないよ、予想はつくけどね。あの子は母親のことが嫌いなのだ。」

えっと、血の話だったねえ。その血は私のせいじゃないよ。ルツソでの実験をするときはいつもあの子を裸にするからね」

抵抗しても無駄だと知ったおばあさんは、抗うことなく言葉を紡いでいきます。

「そうですね……では、次の質問です。」

外れ物のくせに、このような人気の無いところに一人きりで住むとは珍しいですね。本来ならば大勢の外れ物が居るところに住んで外れ物が情報を交換し合うという集会などにも行くでしょうに、なぜですか？」

「別に、一人って訳じゃないさ。でも、大勢は嫌いだからね。二人も居れば十分」

コンコンコン……

おばあさんはルボの質問に答えようとしたが、ノックの音に遮られてしまいました。

「誰だい？」

おばあさんが問いかけます。

「私よ。ライリーよ」

「そうかい。扉は開いているから、入っておいで」

家の中に入ってきたライリーは、首を傾げました。

「どうしてルボさんとトートさんがここに居るの？」

「ちよつと、ね。君のおばあさんに用があつたんだ」

ベッドに座ったまま、ルボは優しくに言いました。

「ふん。よく言うよ　ライリー、何を持ってきてくれたんだい」

「おかあさんから頼まれたワインを」

そう言いながらライリーは、かごをおばあさんに渡しました。

ルボは問題無いと思ったのか、見ているだけです。

「おや、このパンケーキはなんだい？」

おばあさんは、ワインの入ったかごをそばのテーブルに置くと、

かごの中に一つだけ入っていたパンケーキを掴みました。

「おかあさんが、お腹が空いたときのために。って作ってくれたの」

トートが目を見開いて、いきなりおばあさんの元へ駆け出しまし

た。

「そうかい。　じゃあ、ライリー。あなたは明日からもう、来な

くて良いよ」

おばあさんは、ライリーに向けて微笑みました。そして、ルボを睨みます。

「あんたの思い通りにはさせないよ」

トートが、おばあさんが持つパンケーキに手を伸ばします。しかしおばあさんはトートの手をかいくぐり、パンケーキを飲み込みました。

ライリーとルボが啞然としている前で、おばあさんは血を吐いて倒れてしまいます。

「しまった！」

ルボが慌てておばあさんのそばに駆け寄りますが、もう、手遅れでした。

ライリーの目は虚ろです。

「どうしたんですか！」

開けっ放しになっていた扉から、男が入ってきました。男は、森の反対側の村に住んでいる狩人でした。

狩人は、おばあさんを見て一瞬眉をひそめましたが、ライリーを見た次の瞬間、目を見開きました。

「カリノ！もしかしてカリノじゃないか？」

狩人が呼んだその名は、もうほとんど使われていなかったライリーの本当の名前でした。カリノとは「かわいらしい」と言う意味です。

「失礼ですが、あなたは？」

ルボが尋ねます。

「この子の父親です。以前は妻と暮らしていたのですが、ある日突然妻と共に居なくなってしまった」

「そうですか。ところであなたはこちらの方をご存知ですか？石自体には興味が無いので、お知り合いでしたら埋葬などはそちらに」

「石……？」

「ああ、すいません。どうしても回りくどい話し方をする癖があり

まして。錬金術では身体を象徴するのが石でして」

ルボが話を進めていきます。その傍らでライリーは、おばあさんの死体をじっと見つめていました。

トートは、おばあさんの目を閉じさせると、身体の向きを変えてライリーを　ずきんを見つめました。トートが始め模様だと思っていたそれは、ルボの言ったとおり、血痕でした。

「ああ、なるほど。しかし、初めて見た方です。……ところで、あなたは錬金術師なんでしょうか。それに、状況も教えていただきたいのですが」

狩人が困惑した表情で尋ねました。

「あなたの疑問ももっともです。しかし、申し訳ないながらお教えするわけにはいきません。ただ、教皇様のご意思とだけ……」

その返答を聞いた狩人は、深く頷きました。この国の人々にとって、教皇の意思は絶対なのです。

「分かりました。では、その方のご遺体は」

「ええ、こちらが責任を持って埋葬させていただきます。ただ、問題はその子ですね。引き取られますか？　この森を西に行った村に、母親も居るそうですが」

ルボと狩人の視線がライリーに向けられます。

トートが口を開きました。

「どうする？　おとうさんと一緒に住むか？　それともおかあさんのほうが良いなら　」

「おとうさんと一緒に住む」

トートの言葉をさえぎって、ライリーが言いました。それまでとは打って変わって、きっぱりとした口調でした。

そして、ライリーは狩人を見上げ付け足しました。

「だって、おかあさんは死んじゃったもの」

ライリーの顔には、笑顔が浮かんでいました。

うつそつと茂る森の中を、トートとルボが協会に向かって歩いていました。

今度は迷わないように、トートが一步前を歩いています。

「さて、あの死体の始末も済んだことですし、さっさと協会に報告しますか」

ルボが言いました。

あの後、おばあさんの死体はトートとルボが家のそばに埋めました。

村人などが死んだ場合、この地域では土葬するのが一般的です。死体を燃やすのは、死者への侮辱と取られるからです。しかし、既に「人」ではない外れ「物」の死体などは、一般人に見つかってはいけないこともあり、燃やすのが規則になっています。

けれどもトートとルボは、おばあさんが煮詰めていた紫の液体が床を腐らせたことを思い出し、燃やす代わりにその液体を振り掛けました。

もしかしたらその様子がトートには刺激的だったのかもしれない。

トートの返答はありません。

「結局、ライリーの前でおばあさんが死んでしまったことを気に病んでいるのですか？ あれは不可抗力ですよ。それとも、おばあさんの死体のほうでしょうか」

ルボが慰めの言葉をかけると、トートは足を止めて振り返りました。

「ルボさん」

「なんですか？」

「ずっと気になってたんですけど、さっきの男の人、外れ物とは面識が無いって言ってましたよね？」

「……ええ」

いきなりの質問に困惑しながらも、ルボは答えました。

「でも、戸籍の上では彼らは親子なんですよ」

「どうしてそんなことを知っているのですか？」

トートの目は確信に満ちていましたが、ルボはあえて問いかけませんでした。

「覚えてるんです」

「外れ物の対象である、あの老婆についての資料は僕も貰いましたが、そこにはそんなこと書いていませんでしたよ。ましてや、君は僕の資料より情報量は圧倒的に少なかったはずでしょう？」

「違うんです。覚えてるんですよ、今まで見たものを全部」

「……それが君の能力ですか？」

「はい。十年ぐらい前に、森向こうの村に住んでいたことがあるんです。そのときに、協会の名簿を見せてもらいました。そこには確かにあのおばあさんと狩人は親子だと書いてありました」

それを聞いてルボは、いきなり歩き出します。

「時間が惜しい。歩きながら話しましょう」

トートは慌てて、ルボよりも一歩前を歩き始めました。二人は足を速めます。その状態のままで、トートは言いました。

「思えばいろいろと変なんですよ。ライリーちゃんが、あんなにも早く眠りから覚めておばあさんの家に来れたこととか、今日に限ってタイミングよくライリーちゃんのお父さんが現れたこととか。あの森を人々が通ることはほとんど無いっていうのに」

それを聞いてルボは、顎に手を当てて、思い出すように言いました。

「そういえば、確かにおかしいですね。そういえばライリーは、母親に頼み事をされたのに、母親は死んでいるだなんて変なことも言っていましたし……」

「でしょう？」

「……もしかして、ライリーには毒に対する耐性があるのではないですか？ 即効性の毒を飲ませてでも死ななかつたのですから」

「それなら、魔の花に酔わなかつたのも頷けます。なら、ライリーちゃんのおとうさんがタイミングよく現れたのは」

「親子なら、ライリーを使った実験に彼も関与していたでしょう。今日現れたのは……実験が終わりを向かえた？」

話しているうちにトートとルボは森を抜けました。目の前には広場へと続く、東通りと呼ばれる街道が通っています。

「嫌な予感がします。一度ライリーの家へと向かいましょう。彼女の家は何処ですか？」

ルボがトートに尋ねました。

「この通りの、外側から五軒目です」

この街では、家の数え方などは街の中心にある広場を基準に考えます。東通りがそう呼ばれるのは、広場から東の方向に通りがのびているからです。外側から、と言うのは街の外側から数えて、と言う意味です。

「この家ですね」

家の数を数えながら歩くと、五軒目の家はもう目の前です。ルボがノックもせず家扉を開けると

薄暗い部屋の中に人影が二つあります。床には大きな円に幾何学模様が足されたものと、少しはなれたところに小さな円と三角形が二つ組み合わさった模様が書かれてありました。

大きな円の中心に立っているのはライリーで、小さな円の中心に立っているのは狩人でした。

部屋の四隅には蝋燭が一本ずつ立てられ、狩人は本を片手にルツソに向けて一生懸命呪文を紡いでいました。それは遠い国の言葉な

のでライリーには何を言っているかわかりませんでした。

「無駄ですよ」

扉が、突然開きました。まぶしい光が部屋に差し込みます。思わずライリーと狩人は目を細めました。

「その本に書いてある呪文は使えません」

初めに部屋に入ってきたのはトートでした。その後が続いてルボも入ってきます。

「ライリーちゃんを依り代に、魔物を呼び出そうという魂胆なのでしょう？　けれども、あなたが今開いているであろう一七三ページの呪文には、五行目に違う術の呪文が混ざっているのですよ」

トートは狩人のもとへ向かって、ゆっくりゆっくり歩みながら続けました。

「ああ、ちなみにそこを飛ばしても意味ありませんよ。その他の所も、少しずつ間違ってますからね。疑うなら暗唱して見せましょうか？　本に載ったままの、その呪文全て」

狩人はトートの言葉に驚き、何度か詰まりながら言いました。

「そ、そんなことが出来るはずが無い。だっ、だってこの呪文は五ページにわたって書かれてあるんだぞ！」

狩人は、怯えているのにも関わらず、決して円の中から出ようとはしません。

「呪文の長さは関係ありませんよ。この職業についていると、禁書に指定されているものでも堂々と読むことが出来るのでね」

禁書とは、外れ物の知識が書いてある本のことです。その危険性から、一般人に出来ることが無いよう、教会が回収しています。

「何を言って

」

「だから、覚えていると言っているんですよ」

トートは語気を強めて言いました。

「いいですか？　ちゃんと確認してくださいね」

そう言った後トートは、ルボたちには分からない言葉を喋り始めました。それは抑揚がほとんど無く、脳に直接響くような、心臓を誰かに握られているような、気分が悪くなる発音でした。

トートが言葉を紡げは紡ぐほど、本を見ている狩人の顔色は青くなっていきました。

その様子を見たトートは、最後に小さく、今までとは少し違う言葉で二、三語呟くと、一度大きく手を打ち合わせ、呪文を中断しました。

「どうです？　合っていましたか？」

肩を疎めるトートに、狩人は言い捨てました。

「このっ、外れ物！」

トートの目つきが鋭くなります。

「俺のことをいくら外れ物と言おうが構いませんがね。それよりも、自分の親を見捨てて、自分の娘を使ってこんなことしてるあんたのほうか、よっぽど化け物だよ。どうせ、娘を実験台に差し出す代わりに、この子を術に耐えられる身体にしてくれ、とでも言ったんだろ」

トートの口調は本来のものに戻っていました。狩人に歩み寄る口ポの爪先が、円に触れました。

「ちょ、この円を消したら結界が……」

狩人が今まで以上に慌て始めました。地面に書いてある模様が崩れると、狩人を守っている結界が壊れ、狩人がこの世から消えてしまふのです。しかし、円から出るこの出来ない狩人には、成す術がありません。

「そんなこと知るか」

トートは爪先を捻り、円の一部を消しました。

「うわあ！」

狩人は頭を抱えてしゃがみ込みます。

「何をやっているのですか？」

そこにライリーを連れたルボがやってきました。ルボはライリーと手を繋いでいます。

ルボはトートが狩人と話している間、ライリーを円の中から無事に連れ出していたのでした。トートに言われた手順にしたがって模様を消していったのです。

「……え？」

狩人は何も起こらないことに疑問を抱き、つぶっていた目を開けて、トートたちを見上げました。

「どうして、何も起こらないんだ。術の反動が来るはずだろう？」

呆然と呟く狩人の腕を、トートが掴み、そのまま引き上げました。「術を中断するのにもちゃんとした手順があるんだよ。そんなことも知らずに術を使うな」

「まあまあ。トート君、落ち着いてください」

今にも噛み付きそうな勢いのトートに、ルボが声をかけました。

そして、安堵している狩人にも言葉をかけます。

「あなたもそこでじっとしててください。逃げたらどうなるか……分かりますよね？」

狩人はルボの鋭い視線に射抜かれて、呆然と立ちすくみました。

ルボは、今度はライリーのそばにしゃがみ、目線を合わせて言います。

「ライリーちゃん、あの後君の家に行かせてもらっただけ、おかあさんは血を吐いて倒れていたんだ。残念ながらもう死んじやっていたけど――」

「残念なんかじゃないよ」

ルボの言葉をさえぎって、ライリーは言いました。

トートは狩人が逃げないように腕を掴み続けています。ルボの言葉が効いているので、掴む必要が無いことをもちろんトートは知っています。しかし、それではトートの気がすまないのでしょうか、狩人の腕を掴んだままです。

「どうして残念じゃないのかな？」

ルボが、あくまでも優しく問いかけます。

「だって、おかあさんのこと大嫌いだから。お酒を飲むといつもぶつんだもん」

「だから殺したの？」

「そうだよ！　おかあさんが吐いたばかりの血はとても赤くてとても綺麗だった」

その様子を思い出したのか、ライリーは満面の笑みを浮かべました。

「どうやって殺したの？」

ルボは、動じることなく新たな質問をしました。

「おかあさんが作ってくれたパンケーキだよ。酔ってるのに機嫌がよかったから、おかしいなあと思って、無理矢理食べさせたら死んじゃった」

ライリーは笑顔で続けます。

「おばあさんもいつも変なことするから嫌いだった。でも、髪を赤くしてくれたし、最後に綺麗な赤色を見せてくれたから許してあげても良いかな？」

これでやっと、おとうさんと二人きりで幸せな生活を送れるもの

「でも、そのおとうさんは君のことを殺そうとしたんだよ？」

ルボがライリーの機嫌を伺うように、小首をかしげながら尋ねました。ルボの前髪が、重力にしたがってさりと移動します。

ルボとライリーの会話を聞いて、狩人はライリーのことを恐ろしいと思ったのでしょう。狩人の顔が引きつりました。

ライリーが答えます。

「いいの。だって、小さい頃おかあさんのことをぶって、赤い血を見せてくれたもの。おとうさんも赤色が好きってことだもん」

「と、言っていますか、どうしますか？」

ルボは、トートに聞きました。トートは答える代わりに、ライリーに尋ねます。

「他に血の繋がっている人はいないのかな？」

「みんな死んじゃった」

それでも父親と過ごすことが出来るのが嬉しいのか、ライリーは笑顔のままでした。

ライリーの言葉を聞いて、トートは何も言わず、ルボに一瞬視線を向けるだけでした。

少しの沈黙の後、ルボが口を開きます。

「本来ならばこのような現場に立ち会ってしまった以上、外れ物の最有力候補として協会に連れて行くのですが……」

狩人の目が恐怖に染まりました。今までに外れ物と疑われて連れて行かれた人は皆、息をせずに無残な姿で帰ってくることを狩人は知っていたからです。

ルボはちらりとライリーに目を向けてから続けました。

うつそうと茂る森の中を、名も無い狼が二人、両手に本を持って歩いていました。

「ありがとうございます」

一歩前を歩いている 数十分前にはトートと名乗っていた

男が、首だけ振り返って言いました。

「何のことでしょう。僕はただ、君の言うとおり手柄になるから本を回収しただけです」

「手柄が欲しいのなら、あの男を連行すればよかったのでは？ 僕たちの権限を持てれば、協会の領域関係なく連れて行けたはずですよ？」

そのままでは話しにくいと思ったのか、一歩前を歩いていた茶髪の男は、歩くスピードを落として、耳飾りをつけている男の右側に並びました。

耳飾りの男は小さくため息をつき、言います。

「君も言うようになりましたね。」

子供には親が必要なんです。自分を守ってくれる親が。特に人と違うとなると、迫害されますからね。自分で立てるようになるまでは、頼ることも覚えないと」

「そうですね。……守ってくれる人もいなくて、頼ることも出来ないのは本当につらいですから」

茶髪の男が相づちを打ってから、二人はしばらく何も喋りませんでした。

木が茂っているせいで空は見えませんが、森の薄暗さから、太陽が大分傾いていることが分かります。

先に口を開いたのは耳飾りの男でした。

「そつえば、火打ち石を持っていますか？」

「ええ、持っていますが……どうしたんですか、いきなり」

「この本を、燃やしてしましましょう」

耳飾りの男は、いたずらを思いついた子供のように、無邪気な笑顔を浮かべました。

「おばあさんのことはともかく、ライリーちゃんたちのことは言うわけにはいきませんからね」

それを聞いた茶髪の男は、ああなるほど。と呟いてから、耳飾りの男に火打ち石を渡しました。

「おばあさんのほうは、必要な情報は聞き出したので殺した。ということにしましょうか。その分の情報は本の中にあるでしょう。火をつけるので今のうちに読んじゃってください」

耳飾りの男は、火を起こしながら言いました。

「あ、それなら、全部読んだことがあるので大丈夫です」

茶髪の男は本のページを破り取ると、火がつきやすいようにかるく丸めます。

火を起こしている耳飾りの男は手馴れているもので、少し経つとあつという間に火は本に燃え移りました。

空気も乾燥しているので、火はあつという間に本を包み込みます。

「さて、それではさつさと帰って、報告しましょうか」

火をつけた耳飾りの男は、本が燃え切ったのを確認すると、本を足で踏み潰し、土を踏み均しました。

「はい」

しゃがんで本が燃えるのを見ていたもう茶髪の男も、そう言っただち上がります。そして、迷わないように先輩である男より早く、一步を踏み出しました。

少し歩いて森を抜けた二人の視野が、急に広がります。二人の視線の先に見える西の空は、傾いた太陽のせいで真っ赤に染まっています。

3 (後書き)

続編「狼と狼の物語 - 灰」はこちら

<http://ncode.syosetu.com/n8628h/novel.html>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0411f/>

狼と狼の物語 - 赤 -

2010年10月8日15時50分発行